

増賀聖人説話一覽——『撰集抄』注釈余滴——

安 田 孝 子

『撰集抄』卷一は、「増賀聖人」説話によって始められる。名利を心から厭い、「ひたぶるの世捨人」としての増賀の話は、『撰集抄』の巻頭話にふさわしく、この一説話によって『撰集抄』の性格が物語られ得るときえ考えられる。

狂気を振舞い、名譽・権力から遠ざかつて、真の仏道修行を試みた増賀上人の説話は、仏教の世俗化する時代にあつて、世の人々から興味を持たれ好んで伝承されたと思われる。『撰集抄』の編者も、増賀・玄賓・行賀といった清僧たち、あるいは発心し名利を全く棄て去ろうとする真譽・永玄・静円・観釈・顕基・寂心・寂照その他多勢の出家遁世者を取りあげ、西行像と重ね合わせながら、この世における苦悩の姿・求道の姿を追っている。その第一に挙げたのが増賀聖人説話であつた。

増賀聖人に関する説話は、折表に示したように多く説話集に記載され、その他作品中に引用されることも屢々である。この説話については、次の諸氏のご論考がある。

○風狂の先達

——増賀聖人について——

西 垣 修（注）

○増賀聖奇行説話の検討

——法華験記・今昔・続往生伝の対比——

平林盛得^{〔注2〕}

○撰集抄卷一第一話「増賀上人之事」をめぐって

稲垣泰一^{〔注3〕}

○『発心集』における増賀

——「物狂ひ」説話を中心に——

藤本徳明^{〔注4〕}

右の諸論を参考にしつつ、表においては、増賀聖人説話の内容を分類・比較して、説話集間における類似性を探し求め、この小考において確認しておきたい。

まず、説話内容を整理すると、

説話内容

- 一 1～6 比叡山に登り慈恵大師の弟子となり修行に入る。
- 二 7～18 修行の様子——高僧となるにふさわしい真摯な修行の姿——
- 三 19～28 修行の様子——殊更に狂気を装い、名利からの離脱を願う修行の姿——
- 四 29～32 臨終における奇行および入滅。
- 五 33～37 死後のこと。その他評語・賛など
- 六 37以下 別系統説話

增賀聖人說話一覽表

増賀聖人説話		説話集	巻 ～ 話	作 者	成立年代	番号
41	天禄三年(972)仏像を作り直す					
40	止観を書写するための紙を性空より受ける					
39	統理(宗正)を戒める					
38	保胤に法文を教える					
37	賛					
36	評語					
35	石塔を建てる					
34	遺体破損なし					
33	遺言により土葬					
32	入滅	14 80才	13			
31	臨終の前、歌を詠む	7 1 87才				
30	入滅の前、胡蝶楽を舞う					
29	入滅の前、囲碁を打つ					
28	臨終の前講筵を設く					
27	法会に請ぜられ赴くが、施主といさかい帰る					
26	慈悲僧正慶賀の日、奇行					
25	多武峯に籠る↓(8をも参照)					
24	后宮出家の戒師を頼まれるが、奇行をなして帰る	6	5			
23	冷泉院の護持僧を頼まれるが、奇言をなして帰る					
22	内論義の後、夫と共に供を受ける					
21	師に奇行を戒められる(名利を捨てるのは心の問題であると説いて戒められる)					
20	伊勢神宮に祈請					
19	根本中堂にて道心のつくことを祈る					
18	隠棲中悉く都鄙の事を知る	11				
17	長徳二年(986)観音・文殊(または普賢)来影					
16	正暦元年(990)不動形をなして悪鬼を追う					
15	寛和年中(985-987)玄義抄などを撰す					
14	天延二年(974)広学堅義を修す					
13	諸仏(あるいは釈迦・普賢)の来護	10	9	8		
12	夢に南嶽・天台両祖師現われる					
11	法華三昧を修す(康保元年(天延元年)四李別に懺法を修す)					
10	康保二年(965)法華文句を説く					
9	康保元年(964)摩訶止観を講ずる					
8	如寛の勧めにより多武峯に入る(応和三年(963))	7	6	5	4	3
7	天曆二年(948)夢に毘耶離城居士に逢う					
6	多武峯に登ることを希望するが許されず狂気を振舞う					
5	帰宅し母に諫められる					
4	叡山に登り慈恵僧正の弟子となる(10才)聡明にしてよく修行する	4 10才	3 4才	2	1	
3	叡山に入り修行したという(4才・7才)					
2	坂東下向の折馬より落ちる					
1	増賀聖人出自(または人物)について					
番号	説話内容					
	本朝法華験記	下～82	鎮源	1043	(1)	
	扶桑略記	長保5・6・9条	皇円	1107～	(2)	
	江談抄	1(題目のみ)	大江匡房談藤原実兼筆録	1099～1104	(3)	
	続本朝往生伝	10～12	大江匡房	12C初	(4)	
	今昔物語集	12～33		"	(5)	
	"	19～10		"	(6)	
	"	19～18		"	(7)	
	今鏡	9	寂超?	12C後半	(8)	
	多武峯略記		静胤	1197	(9)	
	宇治拾遺物語	143		13C初	(10)	
	古事談	3(286)	源顕兼	1212～1215	(11)	
	発心集	5(1-5)	鴨長明	1214～1215	(12)	
	"	15(2-3)	"	"	(13)	
	"	54(5-7)	"	"	(14)	
	教訓抄	5	狛近真	1233	(15)	
	撰集抄	1～1		13C半	(16)	
	私聚百因縁集	8～3	住信	1257	(17)	
	"	9～1	"	"	(18)	
	沙石集	10本-1	無住	1283	(19)	
	元亨釈書	10	虎関師錬	1322	(20)	
	僧賀上人発心事			14C半～	(21)	
	三国伝記	10～15	玄棟	15C初	(22)	
	多武峯縁起		一条兼良?	15C	(23)	
	増賀上人行業記			16C半	(24)	
	法華経直談鈔	8末	栄心	16C半	(25)	
	扶桑隠逸伝	中	元政	17C半	(26)	
	東国高僧伝	5	高泉性激	17C末	(27)	
	本朝高僧伝	9	師蜜	18C初	(28)	

○印は、表の右欄に示す説話集の中に、上欄の説話内容が今
○印の中の数字は、その説話内容の配列順位を表す。
△印は、内容が簡略化されているか、または少し異なるものの

右の如く内容を大別できる。この各々の枠の中で特に類似性の目立つ説話集を挙げると次の通りである。

一 ①説話内容 1・2・3・4 をほぼ同じように含むもの

『本朝法華驗記』、それを典拠とする『扶桑略記』、『今昔物語集』、『元亨釈書』、『増賀上人行業記』、『東国高僧伝』、『本朝高僧伝』

右の説話集は、増賀の生いたち、仏道への志向の姿に興味を持つものといえる。

②説話内容 5 (帰宅して母に叱られ改めて修行の覚悟をかためる) を含むもの

『三国伝記』、『増賀上人行業記』、『本朝高僧伝』

この部分は、恵心僧都が母から諭される話(例えば『今昔物語集』巻一五—三九話)などと同趣であり、こうした話に影響されながら後に付加されたものではなからうか。

二 ②説話内容 7・8・9・10・11・12・13・14・15・17 を含むもの

『多武峯略記』、『増賀上人行業記』、『本朝高僧伝』

この三本は、「増賀聖人の伝記」としての性格を持っていて、一般的な概念でいう高僧にふさわしい行いについては増賀のあらゆる事跡を網羅しようとする編纂態度がみられる。

③説話内容 16 を含むもの

『増賀上人行業記』、『本朝高僧伝』

右は、直接書承されたものと思われる。

三①説話内容 19・20・21を持つもの

『撰集抄』およびその抜粋本『僧賀上人発心事』、『増賀上人行業記』

伊勢神宮に祈請する話^{〔註5〕}は、表の中では右の三本に限られる。『撰集抄』においては、「序」に「偏に冥助をあをぎ奉らんが為に、巻毎に神明の御事を注載奉るに侍り」とあり、また、「増賀聖人」（巻一―第一話）の終りに「は、右の19・20・21の内容を受けて、「伊勢太神宮の御助にあらずは、いかにしてか此心も付侍るべき也」とある。このように前後にはそれに相応する記述がみられるのである。『増賀上人行業記』は、二①の項でも述べた如く、先行文献に記載される増賀の行動を、あらゆる角度からとらえようとしている態度がみられ、この部分も『撰集抄』などから採られたのではなからうか。

②説話内容 23・24をつづいて記すもの

『本朝法華驗記』、『多武峯略記』、『元亨釈書』、『増賀上人行業記』、『扶桑隱逸伝』、『本朝高僧伝』
右の説話集においては、二つの事柄は一まとめに伝承されたものと思われる。

③説話内容 24を単独で一説話とするもの

『今昔物語集』巻一九―一八話、『宇治拾遺物語』一四三話

右二本へは、それぞれ別の経路から所収されたものと考えられる。

四 説話内容 29・30・31・32を含むもの

『続本朝往生伝』、『今昔物語集』、『発心集』、『私聚百因縁集』、『増賀上人行業記』

高僧の修行の姿として直截的表現でない右の内容は、高僧伝の類には採られない。

『私聚百因縁集』の説話の中には、『発心集』を典拠とするものがいくつかあり、直接関係も指摘されている。しかし、この説話についていえば、築瀬一雄氏も否定しておられる^(注6)ように、直接関係はないと思われる。表現は勿論のこと、細部に至っては内容も異なるところがあるが、ただ内容の骨子のみとりあげることとなると、表の如く説話内容27以外は両者重なる部分が多い。『発心集』第五話(二一五)および第一五話(二一三)は、間接的に『私聚百因縁集』八―三の成立に影響を及ぼしていると考えられる。

五 説話内容33・34をつづいて含むもの

『多武峯略記』、『元亨釈書』、『増賀上人行業記』、『東国高僧伝』、『本朝高僧伝』

増賀入滅後の事跡については、恐らく後に加わっていった記述ではなからうか。評語・賛などは各々の説話集の編集目的に合わせて異なる。

六 説話内容39・40・41は、増賀以外に視点を置いた説話で別系統のものである。

以上、増賀聖人説話にみられる彼の修行の姿には、智行の二様があり、一つは、幼くして自ら発心し、誠実な態度で仏教を学ぶ深智・聡明な学僧増賀(表、説話内容1~18)、一つには、学んだ止観その他を実行に移し、奇異な振舞をすることによって、まことの仏道心を深めようと修行を重ねる穩徳の僧増賀(表、説話内容19~28)である。そのどちらを詳述していくかは、説話集の編集目的によって異なる。その二面を適当に採り込んだ『本朝法華驗記』『今昔物語集』『元亨釈書』などは、学僧の奇行を簡略に述べることによって一層増賀の貴さを浮び上がらせている。

増賀の伝記的性格を持つ『多武峯略記』『増賀上人行業記』『本朝高僧伝』の三本は、出来る限りの事跡をとりあげ

ようとの編集態度が現われており、殊に『増賀上人行業記』は、増賀の行動―行業を全て収める姿勢がみられる。高僧伝においては、高僧にふさわしい修行、そして名利を棄てるための奇行譚は必要な素材であったろうが、入滅直前の奇行(29・30・31)についてはその必然性を認め得ず取り入れなかったものと思われる。従って『東国高僧伝』『本朝高僧伝』にもこの内容は含まれていない。しかし、『発心・往生』を描こうとする『続本朝往生伝』、『発心集』、その影響のもとに成立した『私聚百因縁集』にはこの説話内容(29・30・31・32)が確実にとり入れられているのである。

増賀以外の人物・事柄に視点を置くものは、説話集番号(6)(7)(8)(9)(10)(11)(12)(13)(14)(15)(16)であって、別系説話といえる。

『撰集抄』には、巻一第一話の他、巻九第二話(一一二話)に内記入道(保胤)に止観を伝える話、巻九第五話(一一五話)、行真(願長)に戒を授ける話などあるが、いずれも偉大な僧、増賀として描かれ、『撰集抄』作者は、この増賀を一巻の巻頭話に置いて、種々の清僧の姿を語り始めることになるのである。

注

△1△ 『明治大学人文科学研究所紀要』第三号 昭30・3(『風狂の先達』角川書店 昭56・8所収)

△2△ 『国語と国文学』昭38・10

△3△ 『説話』4 昭47・12

△4△ 『説話・物語論集』6 昭53・5

△注1・2・3・4△に示した論文の他、『世捨て奇譚 発心往生論』馬場あき子著(角川選書98)にもとりあげられ作家の目を通しての増賀奇行譚論が記される。

△5△ 伊勢神宮祈請については、前記稲垣氏の論文において指摘され、また、西尾光一氏も、『伊勢神宮に詣でたという神明関係の点』は、『撰集抄』の特質の一端を示すものとして、ご論考の中で触れておられる(『西行仮托の説話評論』『日本文

△6▽

芸の世界』桜楓社 昭43・5所収
「私聚百因縁集出典考——発心集と関係のある説話について——」(築瀬一雄 国語と国文学一八一〇 昭16)を参考にさせていただいた。

なお「増賀聖人説話一覽表」作成に用いた本文は、次の書による。

- (1) 『本朝法華驗記』——日本思想大系7
- (2) 『扶桑略記』——国史大系12、長保五年六月九日の条。
- (3) 『江談抄』——群書類従 第二十七輯 雑部
- (4) 『続本朝往生伝』——日本思想大系7
- (5) (7) 『今昔物語集』——日本古典文学大系
- (8) 『今鏡』——日本文学大系 第十二卷
- (9) 『多武峯略記』——群書類従 第二十四輯 釈家部
- (10) 『宇治拾遺物語』——日本古典文学大系
- (11) 『古事談』——古典文庫60『古事談上』小林保治校注(現代思潮社 昭56・11)
- (12) (14) 『発心集』——角川文庫
- (15) 『教訓抄』——日本古典全集 第四十三卷
- (16) 『撰集抄』——『撰集抄 校本篇』(笠間書院 昭54・12)
- (17) (18) 『私聚百因縁集』——大日本仏教全書 第九二卷
- (19) 『沙石集』——日本古典文学大系
- (20) 『元亨釈書』——大日本仏教全書 第六二卷
- (21) 『増賀上人発心事』——天理図書館保井文庫蔵。昭和五十六年六月二十八日説話文学会において阿部泰郎氏が紹介された。
- (22) 『三国伝記』——大日本仏教全書 第九二卷
- (23) 『多武峯縁起』——群書類従 第二十四輯 釈家部

- ②4『増賀上人行業記』——統群書類從 第八輯下 伝部 「和州多武峰増賀上人行業記」
②5『法華經直談鈔』——『法華經直談鈔』卷第八末、法師功德品第十九、廿五増賀紙從聖空進事（臨川書店昭54・5刊）
②6『扶桑隱逸伝』——寛文四年（一六六四）刊の板本によつた。名古屋大学附属図書館岡谷文庫蔵。次に本文を記す。
『扶桑隱逸伝』中 艸山沙門 不可思議（元政）

増賀

増賀^ヘ者。平安城^イ人。諫議大夫橘ノ恒平^カ之子^{ナリ}也。

十^ニ歳^ニ登^リ睿^ニ山^ニ。師^ニ慈^ニ慧^ニ。性^ニ聰^ニ穎^ニ。操^ニ履^ニ潔^ニ。学^ニ綜^ニ頭^ニ密^ニ。尤^ニ達^ニ止^ニ觀^ニ。而^ニ惡^ニ利^ニ名^ニ。絶^ニ交^ニ謁^ニ。安和上皇勅^ニ為^ニ供^ニ奉^ニ。佯^ニ狂^ニ垢^ニ汗^ニ而逃^ニ去^ニ。

太皇太后敬^ニ事^ニ。為^ニ師^ニ。而延^ニ宮^ニ中^ニ。便^ニ於^ニ采^ニ女^ニ中^ニ。出^ニ麗^ニ語^ニ。又罷^ニ去^ニ。

慈慧任^ニ僧^ニ正^ニ。入^ニ宮^ニ賀^ニ謝^ニ。翼^ニ從^ニ甚^ニ盛^ニ。賀^ニ帶^ニ乾^ニ魚^ニ為^ニ劔^ニ。乘^ニ瘦^ニ牒^ニ牛^ニ。交^ニ先^ニ驅^ニ之^ニ列^ニ。諸^ニ徒^ニ叱^ニ而^ニ去^ニ之^ニ。

賀^ニ厲^ニ声^ニ曰^ニ。僧^ニ正^ニ之^ニ前^ニ馳^ニ。去^ニ我^ニ誰^ニ乎^ニ。聽^ニ者^ニ笑^ニ而^ニ伏^ニ。常^ニ自^ニ歌^ニ曰^ニ。苦^ニ哉^ニ。名^ニ利^ニノ^ニ人^ニ。樂^ニ矣^ニ。乞^ニ兒^ニ身^ニ。

卒^ニ年^ニ八^ニ十^ニ七^ニ。増賀^ニ。或^ニ作^ニ僧^ニ賀^ニ。

贊^ニ曰^ニ。増賀^ニノ^ニ事^ニ。編^ニ輯^ニノ^ニ中^ニ多^ニ所^ニ闕^ニス^ニフル^ニ焉^ニ。非^ニ独^ニ僧^ニ史^ニ列^ニス^ニル^ニ之^ニ也^ニ。已^ニ。其^ニ苦^ニ哉^ニノ^ニ歌^ニ。吾^ニ取^ニ諸^ニレ^ニ長^ニ

明^ニカ^ニ発^ニ心^ニ集^ニ也^ニ。惜^ニ哉^ニ。我^ニ訳^ニ語^ニノ^ニ拙^ニ乎^ニ。豈^ニ得^ニレ^ニ非^ニ童^ニ寿^ニノ^ニ所^ニ謂^ニ令^ニ人^ニノ^ニ嘔^ニ噓^ニ也^ニ与^ニ哉^ニ。

②7『東国高僧伝』——大日本仏教全書 第六二卷

②8『本朝高僧伝』——大日本仏教全書 第六三卷

『撰集抄』の引用本文は、松平本によつた。

本稿を成すにあたり、名古屋大学附属図書館、天理図書館に大変お世話になりました。
厚くお礼申し上げます。